軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ

Ueber die objectiv hörbaren Ohrgeräusche mit Gaumensegelkrampf. von T. Kimura. 1914.

(Aus der Universitäts-Ohren-, Nasen- und Halsklinik in Fukuoka, Director: Prof. Dr. I. Kubo.)

(大正三年四月二十一日九州地方會ニテ演説及患者ノ供覽ヲナシタ

ルモノナリ)

九州醫科大學耳鼻咽喉科教室 木 村 照 一

抑々耳鳴ハ聽器疾患ノ多クノ場合ニ來ル不快ナル隨伴症狀ノ一也之ヲ二種ニ別ツ自覺的及他覺的耳鳴是也前者ハ諸家統一的ノ見解ナシヤコブソン氏 (Jacobsen) ハ聽神經裝置ノ聽覺刺激ナクシテ迷路或ハ中樞ニ於テ成立シ聽覺ノ根原ハ耳内ナルカ其ノ周圍ニアル可シトシュワルツ氏 (Schwartz) ハ自覺的耳鳴トハ自覺的ニ成立シテ自覺的ニ直覺スルモノナリト云ヒウルバンチャツ氏 (Urbanitsch) ハ毫モ他覺的音原ナク而モ聽神經若シクハ聽神經中樞ヘ諸種作用アリテ成立スル聽覺ナリト稱セリ (一) 後者ハファブリチュウ氏 (Fabricius ab aquandante 1600) 頃世ニ知ラレブリーゲル (Brieger) 氏ノ所謂他覺的可聽性耳鳴 objectiv hörbares entotisches Geräusch. ニシテ前者トノ境界模糊タリト雖臨

原著—軟口蓋痙攣を伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

一六

床のニ音響ヲ周圍ノ人ニモ亦補聽管ヲ使用スルト否トヲ問ハズ聽知セラル、モノ卽是也。

然ルニ Schwartz (Schwartz) Boeck (Boeck) 二氏ガ一八六七年記載セシ迄ハ該疾患ガ世人ニ

注目セラレズ今日ニ至ルモ該雜音ノ學理ト其發生原地ニ關スル諸學者ノ見解ハ各異レリトス。

Burnett (Burnett) ハ歐氏管咽頭開口部ノ離開ニ因スルモノ (2) Brandeis (Brandeis)

ハ軟口蓋運動強ク制限セラレ鼓膜ハ痙攣狀ニ内陷シ其ノ原因ヲ軟口蓋舉筋ニ來メ尙ホ同氏ハ耳鳴ト同時ニ鼓膜軟口蓋及懸壅垂ノ運動ヲ合併セルモノヲ見テ軟口蓋舉筋ノ抽搐性痙攣ナリトセリ (3及4)。

Bigelow (Bigelow) ハ軟口蓋ノ收縮ヲ原因トシ部位ヲ軟口蓋痙攣ニ求メ (5) Briegleb (Briegleb) ハ軟口蓋後方殊ニ著シク運動シ後口蓋弓殆ント中線ニ會セントシ之レヲ歐氏管開大筋ノ作用ニ

由ルト思考セリ (6) Brunner (Brunner) ハ歐氏管離開ニ原因ヲ置キ (7) Holmes (Holmes)

ハ之ニ類似セル歐氏管開大ト同時ニ空氣進入シテ他覺的耳鳴來リシモノヲ (8) Müller (Müller) ハ軟口蓋運動アレド空氣鼓膜ヘ當テ歸ル爲メニ起因シ之レヲ鼓膜緊張筋ノ働キニ歸セリ (9)。

Williams (Williams) ハ軟口蓋痙攣ノ弛緩時ニ雜音アルヲ以テ軟口蓋ノ咽頭後壁ニ當ル際發生スルモノト想像シ (10) Kaufmann (Kaufmann) ハ主トシテ右側ニ又屢々左側ニ雜音アル場合

ニ歐氏管筋ノ運動ナク軟口蓋ノ衝突運動殊ニ右ニ著シキヲ伴ヒタル一例ヲ (11) Szenes (Szenes) 氏ノ報告セルニ例ノ中一例ハ軟口蓋舉筋ノ抽搐性痙攣ニ因スル筋性雜音ニシテ (12) Pick (Pick) 氏ハ咽

グレル氏 (Pegler) ノ一例ハ慢性軟口蓋痙攣ヲ合併シ雜音ハ咽頭ヨリ發生セシモノ、如シト (15) ヲ
 ヴァル氏 (Vali) ハ軟口蓋痙攣ニ由ツテ成立セシ筋性雜音ガ耳内ヘ傳達セシモノナル可シト思考セルモノ
 ヲ (16) ウォルフ氏 (O. Wolf) ハ鼓膜内引ニ (17) ブェルクネル氏 (K. Bürkner) ハ歐氏管加答兒ニ
 罹リ歐氏管カテール挿入ノ時鼓膜内引ト同時ニ他覺的耳鳴アリシモ同炎衝去レハ同時ニ彼モ亦治癒セ
 シ例ヲ (18) シワルツ氏 (Schwartz) ハ軟口蓋運動ト同時ニ雜音ト一致セル鼓膜内引アル者ヲ (19)
 ルツエ氏 (Lucas) ノ報告例ハ他覺的耳鳴同時ニ鼓膜張筋ノ收縮運動ヲ見 (20) フロキンド及カイ
 ゼルニ氏 (Freund u. Keyser) ハ同筋ノ痙攣ヲ合併スル恐怖神經官能症ノ一患者ニ閉眼時ノミ他覺的
 耳鳴アル例ヲ (21) ハング氏 (Hang) ハ鼓膜緊張筋ノ舞蹈病的運動ト確證セル例ヲ尙ホ (22) ワグ
 ネル氏 (Wagner) ハ咽頭筋ノ間代性痙攣ノ爲メ鼓室内空氣ヲ稠密ナラシメ其ノ際空氣ハ鼓膜間隙ヨリ
 出デ爆柝音ヲ發セシ者ヲ記載セリ (23)。

ブルンネル氏及グロスマン氏 (Brunner u. Grossmann) ハ鼓膜緊張筋及馬鐙骨筋ニ原因セリト認メ
 タルモノヲ (24) プレーメル并ニヤロプソン (Bremer u. Jacobsohn) ハ同筋ノ收縮ニ (25) ワランタ
 ン (Valentin) 氏ハ歐氏管筋及耳内筋中主トシテ軟口蓋張筋ハ多クノ人ガ稱セルガ如ク濕潤セル歐氏

原著——軟口蓋癰癰ヲ伴フ他覺の耳鳴ニ就キテ (木村)

一八一

管壁ヲ離開スルニ非ズシテ恐ラクハ該筋ノ蝴蝶骨大翼鈎ニ附着セル腱ノ強力ナル攣縮ニヨリテ起ルモノト説明セリ (26)。

カイゼル氏 (Kaiser) ハ一八九五年獨逸耳科學會ニ於テ本雜音ハ主トシテ筋性ナル事ヲ揚言シ且ツ心音ガ心筋ノ收縮シテ起ルガ如ク鼓膜緊張筋ノ收縮ニテ他覺の耳鳴ヲ成立セシムルナラント然ルニブリーゲル氏 (Brieger) ハ之ニ反對シ (27) シワルツ氏 (Schwarze) ハ小聽骨ノ摩擦音ニ因スルヲ實驗セリト (28)。

我久保博士ハ主トシテ之ヲ軟口蓋舉筋ノ作用ニ歸シ特ニ拮抗筋タル口蓋舌筋口蓋咽頭筋ノ補助及粘稠ナル粘液ノ存在ハ他覺の耳鳴ヲ發スルノ一部ヲ助勢スルモノト説キ (29) 勝治氏ハ發生機轉ヲ軟口蓋筋及咽頭筋ノ收縮遲緩運動トシ (30) 國分氏ハ音源ヲ軟口蓋張筋ニ (31) 小林氏ノ記載セル實例ヲ竅フニ軟口蓋舉筋及歐氏管ノ攣縮ニ因スルモノヲ (32) 其他血管性ノモノヲ報告セルポオールテン (Porten 33) ライヒェンフロスト (Leichenfrost) ヘルトル (Hyril 34) トロルチ (Trölsch 35) ポーニ (Chimani 36) レアイブルン (Keybrun 37) ボルデト (Bordet) ホドグソン (Hodgson 38) シン (Gelle) 氏等ノ如キモノアレドモ本例ト關係ナキヲ以テ述ベズ、サレド最モ多數ニ文籍ニ顯ハレタルモノハ異物ノ動搖ニ因スルモノ也。

之ヲ要スルニ以上述べ來レルモノヲ久保博士ノ分類ニ從ツテ概括センニ (29)。

(A) 血管ヨリ來ル雜音

(B) 鼓膜緊引筋ニ由ル説

(C) 歐氏管相接觸スル二面ガ離ル、時空氣ノ出入スル爲メ生ズル音

(D) 耳内異物ノ動搖

トス。

次ニ余ハ多クノ文籍ヨリ得タル他覺的耳鳴ノ統計的觀察ヲ下サンニ八十三例中性ヲ區別シ得タルハ六十名ニシテ男子二十七名四十五%女子三十三名五十五%年齡ハ五十一歳ノ男子ヲ最高トシ (Jacobson) シワルツト (Schwartz) 氏ノ記載セル五歳ノ小女ヲ以テ最低トス (39) サレド屢々來ル年齡ハ二十歳ヨリ四十歳ニ亘リ鼓膜運動ヲ伴ヒタルモノ十六例一九・二八%軟口蓋運動ヲ合併セルハ二十八例三三・七三%神經素因ヲ有セシモノ二十八例三三・七三%内ツチェク (Tuczek) 氏ハ「メラニコリ」症 (40) カイゼル (Keyser) 氏ハ恐怖性神經症 (41) リヒャウド氏 (Richard) ハ「ヒステリ」ヲ尙ホ本邦ノ文籍四例共ニ素因ヲ有セルモノタリ (42)。

余他覺的耳鳴ノ音學的性質 Acustische Character ヲ確定セルモノアルヲ聞カズスバルジング (Spaulding) スドンプ (Stumpf) ヲァテ (Matte) ケッセル (Kessel) シュナー (Schneider) 氏等ガ自覺的耳鳴ニ就テ求ムル事ヲ得ザリシガ如クニ亦難カラム故ニマッテ氏ガ自覺的耳鳴ニ精確ナル解析ヲ試ミム

原著—軟口蓋癱瘓ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

—110—

トシ耳鳴テフ總括的概念ヲ避ケムトセリ此ノ目的ノ爲メ患者ヲシテ自覺的耳鳴ヲ口述セシメタリ之ニ申テ之ヲ見レバ他覺的耳鳴モ亦古クヨリ此ノ形容的方法ヲ用ヒテ記載サレタリ即チ爆析音捻髮音懷中時計音筋性雜音粘着音爪彈音戛々音彈指音水泡音爪摩音心音樣音電信機音波濤音燥鳴音叩打音太鼓音蚊鳴音破硝子音及破壺音トス最モ普通ナルハ懷中時計音二〇・七%及爆析音二六・五%是也他覺的耳鳴ヲ偏耳ノミニ或ハ兩耳ニ時ニ交代性ニ感覺スル事アリ次ニ距離ハブリーゲル氏 (Brügger) ノ十五米突ツツエク氏 (Tuczek) ノ二珊米突ノ間ヲ往來シ (43及41) 回数ハ五回ヲ少數トシ (K. Bürkner 18) 11百五十回 (G. Avellis 45) ヲ最大數トス尙ホ雜音ヲ定期的非定期的週期的及非週期的ニ分類スル事ヲ得ン。

今余ノ例ヲ詳述シ之ガ解說ヲ試ミム。

患者 佐々木某女 三十七歳ノ既婚農婦

既往症

家族的關係 妹ノ一人濕性肋膜炎ニ犯サレ赤痢ヲ合併シテ死亡セルモノ、外特記ス可キモノナシ。

患者ハ生來虛弱四歲麻疹ヲ經過シ十五歳ノ夏梅毒ニ感染ス其ノ冬慢性氣管枝加答兒ニ惱サレ三年間醫治或ハ民間療法ニ親ミ奏効アリ。

二十歳ノ際健康ナル男子ト結婚シ相和ス然ルニ結婚後三年ニシテ姑トノ間兎角睦カラズ其後僅カノ

事ニ激シ易ク漸次不眠多夢時ニ魔夢ニ襲ハル二十七八歳頃始ト或ル感情ノ衝突ニ由テ突然意識濁シ周圍ノ人ニ關シテ知ラザルモノハ如ク十二時間ノ後極メテ漠然タル追想ヲ抱キテ醒覺セリト二十九歳ノ冬亦同様ノ發作三日ニ亘ル而シテ精神的刺激ハ依然トシテ去ラズ時ニ惡心アリ嘔吐アリ或ハ飽食シ或ハ食氣不振ヲ訴ヘ皮膚蟻走ノ感不眠ニ快惱シ頭痛頭重四肢冷感ヲ加フ。

三十三歳ノ一月頸部壓重鼻咽腔異物ノ感及眩暈ノ主訴ヲ以テ我教室ヲ訪フ

診斷 兩側上顎竇蓄膿症

慢性肥厚性鼻炎

慢性顆粒性咽喉炎

爲メニ入院手術全治退院

サレド鼻咽腔ノ不快ナル感覺ハ依然トシテ去ラズ加フルニ咳嗽咯痰交々至ル時ハ無臭性黃色ノ鼻汁ヲサヘ漏ラスニ至ル三十六歳ノ春突然兩耳ニ波濤ノ騒グガ如キ感覺アリシガ幾何モナクシテ消失シ之ニ換フルニ咽頭後壁ヲ叩打スルガ如キヲ覺ユ折々右ヘ時計ノ刻ムガ如キ耳鳴アリシモ近來稀ナリト云フ。

便通及尿利ニ變化ナシ。

月經 十五歳ニ初潮シ三ヶ月以前ヨリ見ズ。

原著―軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

原著—軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

— 二二 —

體溫 三十六度乃至三十七度三分ヲ昇降ス。

現 症

體格中等榮養可良脈搏九十小ナルモ整調顔貌鬱憂ノ色アリ頭部ノ變形叩打痛ヲ證明セズ口唇鮮紅色舌苔淡濕潤セリ口蓋縫線ハ正直ナルモ懸壺垂左方ニ傾斜シ爲メニ左側口峽ヲ狹隘ナラシメ前後ノ口蓋弓及扁桃腺竇左右共ニ等シク軟口蓋ノ間代性痙攣狀態ヲ見ル。

淋巴腺 頸部淋巴腺ハ米粒大乃至豌豆大ニ腫脹シ彈力性硬可動性ニシテ無痛然ドモ肘腺ヲ觸知セズ。

肺臟 右肺尖打診上短ナリト雖呼吸音ニ變化ナク所々ニ咄軋音ヲ聽ク。

心臟 肥大擴張ヲ證明スル能ハズ心尖部及第二肋間ノ左胸骨緣ニ於テ第一音不純ナルヲ知り且頸靜脈ニ輕キ颯鳴性獨樂音アリ。

腹部 異常ナシ 妊娠四ヶ月

脊柱 第八胸推ニ叩打痛アルモ變形ナシ。

反射機 皮膚反射正常 角膜反射ハ右ハ殆ント欠損シ左ハ鈍口蓋及咽下反射共ニ消失セリ腱反射一般ニ亢進ス。

知覺 眼局セル一定部ハ皮膚神經ノ解剖的區域ニ符合セズ環狀帶狀或ハ半側的ニ鈍麻麻痺過敏ヲ來

シ時間のニ部位變換アリ。

味覺 部分的錯誤亡失鈍麻及過敏ヲ呈ス。

視器 眼球運動眼底及瞳孔共ニ正常視野ハ各色一般ニ狹少シ一部交入ヲ示ス時刻的視野變化ヲ認ム。

嗅器 兩側下鼻道外壁ニ存スル手術孔ハ僅ニ消息子ヲ入ル、ニ足り中甲介前端息肉狀ニ腫脹セルモ膿汁ヲ證明スル事ナク尙上顎竇ニモ然リ嗅覺ヲ檢スルニ過敏鈍麻錯誤ヲ證明ス。

後鼻鏡檢査 軟口蓋鈎ヲ掛クル時ハ軟口蓋舉筋上下シテ歐氏管口開閉スルモ運動不充ナルガ故發音セス開口部附近ハ粘液ヲ以テ被ハレヤンカウエル氏直達檢査法ニヨル時モ音止ムコレ軟口蓋運動不充ナルヲ以テナリ。

聽器 鼓膜ハ左右共ニ稍々内陷スルモ良ク動ク歐氏管ハ左右共ニ狹窄症狀ナシ。

聽力ヲ診査セシニ高調低調何レモ左右十米突以上ノ部位ニ於テ能ク聽クサレドベツォルド氏表ニ由テ右ハ左耳ヨリ佳良ニシテウエーベル氏法左耳ニ偏ス。

喉頭檢査 異常ナシ。

但歩行共齊運動膀胱直腸部位神溫神力神及分泌機能ニ變化ナシ。

糞便檢査 消化不良便ニシテ蛔蟲卵ノ少數ヲ見ル。

原著—軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

原著—軟口蓋癰癰ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

—二四—

血液検査

赤血球數

四三二・〇〇〇〇

白血球數

一・二〇〇〇

血色素量

五〇・九一%

白血球種類ノ百分比例

淋 巴 球

三一・八〇%

中性多核性白血球

六二・三二%

エオヂン嗜好性白血球

三・二〇%

移行 型

二・〇〇%

鹽基性染色性白血球

〇・八二%

チルク氏刺戟型

〇・八二%

之ヲ案ズルニ赤血球ノ増加(Laxenberg)白血球增多症(Tanaka)血色素量減少(Reinert)(46)及淋
巴球ノ増加セルヲ認ム。

ワッセルマン氏反應

陽 性

胃液検査

總酸量

四〇・

乳酸

痕跡

鏡見

變化ナシ

即チ酸減少ヲ示ス。

脊髓液検査

色

水様透明

性

弱アルカリ

初壓

一四〇水柱

終壓

一〇〇水柱

採取量

六・〇

ブレオチトノゼ

ノンネアベルト氏反應

陰性

尿検査 異常ナシ。

他覺的耳鳴検査

原著—軟口蓋癰癰ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

原著—軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

十二六一

患者ノ他覺的耳鳴ハ稀ニシテ且持續時間短カキヲ以テ數十回ノ検査ニ由テ得タル成績ヲ集メ左ニ述ベン。

自覺的症候 「今迄右の耳ばかりきゝましたが四月十九日の朝左にも鳴りました」ト云ヘリ患者ノ耳鳴ハ永キ時二分間短カキハ二三秒ニテ終ル。

初メ毎日一二回時ヲ定メズ不隨意的ニ發生セシモ近來稀トナレリ耳鳴時ハ「咽腔ノドの音が耳へ抜け出る様です」ト此ノ耳鳴ハ意志ニテ制止シ得ザルガ故ニ器械的ニ舌根ニテ軟口蓋ヲ壓上スルカ口裂ヲ能フ限り開クカ外頸部ヨリ口蓋扁桃腺ヲ指壓シテ制限スト。

耳鳴ノ性質ハ粘着セルモノ、剝離スルトキ發スル音「ギチ／＼」ノ如ク或ハ懷中時計ノ秒ヲ刻ムニ似タリ。

尙ホ曰ク耳鳴ノ他ニ二種ノ音ヲ感ス即チ開口シ鼻孔ヲ閉塞シタルトキ發スル「タク／＼音」痙攣狀態甚ダシキトキ口裂及鼻孔ノ開放ニテ起ル鼻咽腔部ノ「キチ／＼音」ナリト。

他覺的症狀 患者ノ耳鳴アリト訴フ診スルニ「オトスコープ」ニテ初メテ訴フルガ如キ音ヲ聽ク音ハ非週期的ニシテ一分間一六〇回ヨリ二六〇回ニ及ブ音ハ軟口蓋ノ將ニ咽頭後壁ヲ辭セントスル時ニ一致シ呼吸及脈搏數ニ關係ナシ特ニ注意ヲ要ス可キハ耳鳴時軟口蓋ノ痙攣強度ニ烈シク且鼻咽腔ハ多

該耳鳴ノ他咽頭後壁ニ發スル音アリ前者ノヨリモ高調ニシテ閑靜ノ室ニ於テ患者ヘ近キ三米近キヨリ遠カルヤ三米半ニ至ル與味アルハ患者ノ左耳ヘ來ル事稀ナルニアリサレド他覺的耳鳴ハ良ク右耳ニ等ク聽知シ得之レニ一致スル鼓膜ノ運動ヲ證明セズ。

耳鳴ヲ止メ或ハ弱ムル場合

a. 「カテーテル」挿入ニテ止ム。

b. 言語中止ム。

c. 口腔諸筋ニ弛ミヲ與フルトキ、但シ頭ヲ枕ニ附ケ横臥スルモ制限スル能ハズ。

d. 口蓋ト舌根トノ間ノ筋肉ヲ緊張スルトキ。

本患者ノ他覺的耳鳴ハ暗示的ニ起サシメ殊ニ靜夜閑室ニ於テ然リ毎回ハ成功セザリキ。

他覺的耳鳴ナキ時軟口蓋痙攣狀態ノ診査

他覺的耳鳴ナキ時ハ訴フルトキニ比シテ軟口蓋痙攣弱ク且咽頭後壁ニ發生スル音ナク運動回數モ一般少シ（九〇—一〇〇）試ニ鼻孔ヲ閉塞セバ「タク／＼音」之ニ一致シテアリ靜夜長三十米突高六米突巾三米突ノ室ニテ能ク十八米突ノ處ニ聞ク今兩側ヘ同時ニ歐氏管「カテーテル」挿入ヲ試ミバ痙攣尙ホ存スト雖弱ク且前鼻孔ヲ閉塞スルモ「タク／＼」音發生セズ。

睡眠時檢スルニ間代性痙攣ナク軟口蓋ハ深ク垂レテ安靜也催眠術ハ能ク之ヲ弱ハルモ停止セシムル

原著——軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺の耳鳴ニ就キテ (木村)

— 二八 —

ニ至ラズ是レ催眠ノ淺キニ由ルナラム。

軟口蓋間代性痙攣ノ原因如何

軟口蓋ハ靜肅ノ鼻呼吸ニアリテハ舌根ニ接ス是レ軟口蓋諸筋ノ平均ヲ保テルガ故也兩側各一個ノ口蓋張筋及口蓋舉筋ハ軟口蓋ヲ共ニ舉上シ前者ハ一部歐氏管軟骨部外壁ニ起始シ歐氏管開大ノ任務ヲ帶ビ (Tournaud) 後者ハ一部同軟骨部ノ後壁ニ始マルモ開口部ヲ狹塞スルノ責アリト (Lucas) 舌口蓋筋咽頭口蓋筋ハ二筋ノ拮抗筋タルヤ疑ナシ懸壅垂筋ハ内筋ナルヲ以テ特種ノ作用ヲ有セズトシテ除外スルモ可ナラン (Hein) 尙ホハイン氏ハ動物試驗ヲ根據トシ口蓋張筋ハ三叉神經口蓋舉筋咽頭口蓋筋ハ迷走及舌下神經舌口蓋筋ハ決シテ單一ノ神經ニ由テ支配セラレズト (47) 尙同氏ハ犬四頭猫一匹ニ就テ頭蓋内顔面神經ヲ刺戟シテ軟口蓋痙攣ヲ來サシメ特ニ口蓋舉筋ノ著明ナル收縮ヲ認メタリトナシ (48) ブルック (Bruck) 氏ハ口蓋張筋ハハイン氏ニ同ジク三叉神經第三枝ニテ支配サレ其他顔面及副神經ノ配下ニアリト云ヒレチイ氏ニ依レバ迷走神經モ之レニ加ハルナラムト大澤岳太郎及ラウベル二氏 (Rauber) ハ口蓋舉筋及懸壅垂筋ハ顔面神經口蓋張筋ハ三叉神經咽頭口蓋筋ハ咽頭神經叢ヨリ支配セラルト (49 及 50) スクノ如ク諸家統一的見解ヲ欠キブルック (Bruck) 氏ガ今尙ホ不明ノ域ヲ脱セズト揚言セルモ亦宜ナル哉。

之ニ由テ之ヲ考フルニ本患者ガ原因ハ此等軟口蓋ニ分布スル神經ノ中樞カ或ハ未梢ノ變化ニ待タザ

攣ヲ伴ヒタル一例ヲ見ルノミニ又神經痙攣ノ一分症トシテ顯ハル、場合ハシハツ (Schütz) シュス
 ル (Schüssler) 氏等ガ報告セルガ如ク甚ダ尠シトセズ (57及58) 尙小腦腫瘍動脈瘤癥痕ニヨル神經ノ持
 續的刺戟流行性腦脊髓膜炎多發性硬化症水銀「アルコホール」鉛ノ中毒更ニブルック氏ハ「ヒステリ
 ー症」ヲ附加セリ (60) 余ノ例ハウルバンチチ^ト (Urbanatschisch 52) ブリイゲル (Brieger 9) ノ報告
 ト同ジク睡眠狀態ハ痙攣ヲ消失シ催眠術ハ能ク之ヲ制限ス而シテ暗示ハ耳鳴ヲ起シ鼻咽腔検査ハ間代
 性痙攣ヲ反射的ニ發生セシメ得ルダケノ變狀ナク然レバ原因ヲ他ニ求メザル可カラズ一般身體的症候
 ヲ通覽スルニ「ヒステリー」症タル事診斷シテ疑フ余地ナシ更ニ同症ヲ起シ得ルノ原因豐富ナルオヤ余
 ハ軟口蓋間代性痙攣ハ中樞性或ハ末梢性器質的障害ニ因スルモノナラズシテ官能^{〇〇〇〇〇〇〇〇}的^{〇〇〇〇〇〇〇〇}神經障^{〇〇〇〇〇〇〇〇}害^{〇〇〇〇〇〇〇〇}即チ「ヒ
 ステリー」ノ一分症候トシテ顯ハレタルモノ也トス。

他覺的耳鳴ノ原發地如何

ヤコブソン (Jacobsohn) カイゼル (Kaiser) シワルツ (Schwartz) ホルムス (Holmüs) 氏等ハ
 鼓膜ノ運動ニヨル本例ヲ記載シ同時ニ鼓膜運動ニ因スル「マノメーテル」ノ昇降セル場合ヲ報告セリ
 余ノ例ハ既ニ述ベタルガ如ク兩側稍々鼓膜ノ内引狀態ニアルモ雜音ニ一致セル鼓膜ノ動搖ナシ「マノ
 メーテル」ノ變化ニ就テハ久保博士ハ單ニ嚙下運動ニヨリテモ消極的變化ヲ來スト云ヘリ故ニ内耳筋

原著—軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ（木村）

—三〇—

ハ本雜音ニ關係ナク尙ホ血管性ニモ呼吸性ニモ亦異物性ニテモ非ザルハ明也。

次ニ他覺的耳鳴ト咽頭後壁ヨリ來ル雜音トヲ比較スルニ前者ハ後者ヨリモ聞エ難シト雖時間的ニ一致シ且軟口蓋ノ咽頭後壁ヨリ辭スル時換言スレバ弛緩時ニ一致セリ同時ニ「カテーター」挿入ハ耳鳴ヲ消失セシメ且軟口蓋痙攣ハ減退ス是レ口蓋緊張筋口蓋舉筋ニ器械的刺戟ヲ與フルガ爲ニシテ他覺的耳鳴ノ消失ハ該部ヨリ以下ノ發音ヲ打消スト同時ニ深部ニ發生セザルノ證也尙此時鼻咽喉検査ニ由テ歐氏管開口部ノ痙攣ニ從テ開閉アルヲ見ル而シテ此ノ軟口蓋運動ハ軟口蓋緊張筋軟口蓋舉筋ノ共同作用タルヤ明ラカ也而シテ該痙攣甚シク且粘液過多ニシテ軟口蓋ガ咽頭後壁ヨリ將ニ離レントスル瞬間ニ發生スル「ギチ／＼」音ハ開大セル歐氏管ヲ通過シ鼓膜ヲ振動セシメ以テ患者ハ之ヲ自覺シ外聽道空氣ノ動搖ハ他覺的耳鳴ヲ發スルノ因ヲナス余ノ例ハ他覺的耳鳴ト軟口蓋痙攣殊ニ軟口蓋張筋并舉筋ノ間代性痙攣ト密接ナル關係ヲ有シ口蓋筋咽頭口蓋筋ハ前者ト抗筋ナル事ハバツサバント氏ヲ始メ諸家ゾ一致スル處該筋ノ緊張セルト否トハ耳鳴ヲ止メ或ハ起シ或ハ弱ムル事ヲ得ン而鼻閉塞ノ際發スル「タグ／＼」音ハ軟口蓋痙攣ニ因テ來ルモノニシテ他ナラズ只軟口蓋ノ咽頭後壁ニ接着スルヤ空氣ノ過剩ヲ入レ緻密トナリ缺陷アラバ脱レントス此ノ瞬時軟口蓋ノ弛緩運動起ルヤ壓迫ヲ蒙レル空氣ハ其ノ罅隙ヲ破ルガ如クシテ出ヅ此ノ音ヤ即是也。

血管性雜音ハ結紮法ヲ推奨ス可シト雖 (Brand, Münch, Chiman) 之ニ由テ更ニ發生セルノ例ナキニ非ズ (Reyburn)。

スツエネス (Szenes) 氏ハ軟口蓋舉筋ノ搐搦性痙攣ニ因スル筋性雜音ヲ歐氏管開口部ハ「ヤッサー」ニ由テ (12) プェルクネル (Bürkner) 氏ハ歐氏管加答兒ノ治療ニ由リ (18) カイゼル (R. Kessler) 氏ハ歐氏管「カテーテル」挿入シテ治セシメシ三例ヲ (53) ツチエック (Tuczek) 氏ハ「メラノロリー」患者ニ耳栓法ヲ施シ治セシメシ例ヲシャード氏 (Schade st. Paul) ハ扁桃腺切除術ニテ (54) ブルネット (Burnett) 氏ハ自然的鼓膜穿孔ガ治療ノ原因タリン例ヲ記載シ (55) 而シテブリーゲル (Brieger) 氏ハ鼓膜緊張筋 (56) アベリス (Gr. Avellis) 氏ハ口蓋舉筋ノ切腱法ニテ治セシメタル場合ヲ報告セリ (45)。

サレド軟口蓋痙攣ニ原因ヲ有スルモノハ切腱法モ可ナラムガ進ンデ軟口蓋痙攣ガ何ニ原因セルモノナルヤヲ詳カニシ治療ノ方針ヲ確定セザルベカラズ只單簡ナル開口ニヨリ或ハ頸部壓迫法ニヨリテ停止シ得バ原因不明ニシテ何等ノ停止シ得可キ手段ナカリセバ姑息の方法トシテ用フルモ可ナラム。

次ニ余ノ例ノ如キ患者ニハ「ヒステリー」ヲ起ス可キ原因ヲ除去シ補助的手段トシテ慰安療法睡眠術榮養療法電氣療法摩擦療法水治療法藥劑療法ヲ行フ可シ余ハ患者ニ臭素劑ヲ與ヘ慰安ニ勉メ更ニ睡

原著——軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ（木村）

— 三 —

眠術ヲ施セシ事三週間ニシテ耳鳴ハ全ク去ル軟口蓋痙攣ハ消失セザルモ減弱ノ呈度ニアリ患者ハ自覺的症狀拭去セラレテ退院セリ。

以上余ノ例及之ガ觀察ニ由テ來ル處ヲ以テ結ベバ。

- (一) 間代性軟口蓋痙攣ハ「ヒステリー」ノ一分症候トシテ顯ハレタルモノ也。
- (二) 他覺的耳鳴ノ原因ハ軟口蓋舉筋及軟口蓋緊張筋ノ間代性痙攣ニシテ粘液分泌過剰ナルハ發生ニ必要ナル要件也。

- (三) 療法ハ原因ヲ去リ慰安療法及催眠術ヲ施シ沈靜劑ヲ投藥シテ效果アリタリ。

稿ヲ終ルニ臨ミテ恩師久保博士ノ懇切ナル指導ト嚴格ナル獎勵トニ向ツテ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

附 加

本邦ニ於テハ既記ノ他久保博士ノ二例ノ供覽田中達三郎氏ノ一例及本年大日本耳鼻咽喉科學會ニ於テ耳殼痙攣ヲ供フ他覺的耳鳴ノ一例ヲ淺井健吉氏報告ス然レドモ詳細ハ遺憾ナガラ竅フヲ得ズ先輩ガ嘗テ報告セシ文籍ハ勉メテ之ヲ省ケリ。

LITERATUR.

- 1) 和田；耳鳴及其療法、
- 2) Burnett; A. J. O. Bd. 16. 1880.

- 3) Brandeis ; A. F. O. Bd. 19. 1882.
- 4) Brandeis ; A. F. O. Bd. 20. 1884.
- 5) Bigelow ; The Medical a Surgical Journal 1877
- 6) Brieger ; K. B. F. O. 1886.
- 7) Brummer ; Z. F. O. X. S. 175.
- 8) Holmes ; Z. F. O. XIII. S. 295. 1875.
- 9) Müller, Jahrbuch der Gesammten Physiologie Bd. II. 1837.
- 10) Williams C ; Z. F. O. Bd. XIII. S. 99.
- 11) Kaufmann ; M. F. O. Bd. 28. 1891.
- 12) Szeues ; A. F. O. Bd. 35. 1893.
- 13) Pick ; A. F. O. Bd. 19. 1882.
- 14) Friedmann ; Z. F. O. Bd. 46. 1904.
- 15) Pegler ; Z. F. O. Bd. 45. 1903.
- 16) Váli ; A. F. O. Bd. 66. 1906.
- 17) O. Wolf ; A. F. O. U. A. II. 2. 1873.
- 18) K. Bürkner ; A. F. O. XXII. 70. 1884.
- 19) Schwartze ; A. F. O. Bd. II. S. 4.
- 20) Lucae ; A. F. O. Bd. IV S. 201.
- 21) Freund u. Keyser ; D. M. W 1891. No. 31.

原著一軟口蓋痙攣ヲ伴フ他覺的耳鳴ニ就キテ (木村)

- 22) Hang ; Ohrenheilkunde 204.
- 23) Wagner ; Allg. M. C. XXXVI. 1890.
- 24) Grossmann ; M. F. O. Nr. 43. 1909.
- 25) Bremer ; M. F. O. Nr. 10. 1876.
- 26) Valentin ; A. F. O. Nr. 46. 1904.
- 27) Brieger ; Beiträge zur O. S. 140. 1896.
- 28) Schwartzes ; Handbuch I. S. 341.
- 29) 久保博士 ; 大日本耳鼻咽喉科會報、IX. No 1 u. 2. 1903.
- 30) 勝治 ; 福岡醫科大學雜誌、II 1908.
- 31) 國分 ; 臨床醫學第一年第二號、1913.
- 23) 小林 ; 大日本耳鼻咽喉科會報、XVIII, V. 1912.
- 33) Poorten ; W. M. F. O. Nr. IV. 1878.
- 34) Hyrtl ; W. M. W. Nr. XIX. 1836.
- 35) Tröltsch ; Ohrenheilkunde S. 446.
- 36) Chimani ; A. F. O. Nr. VIII. S. 62.
- 37) Reyburn ; Z. F. O. Nr. IX. S. 176.
- 38) Hodgson ; A. F. O. 1862.
- 39) Schwartze ; A. F. O. Bd. XIX. S. 42.
- 40) Tuczek ; B. K. W. S. 432. 1881.

- 42) Richard ; C. F. O. Nr. XII. 80. 1883.
- 43) Briger ; L. C.
- 44) Tuczek ; B. K. W. S. 432. 1881.
- 45) G. Avellis ; M. M. W. Nr. XVII. 1896.
- 46) Pathologie des Blutes von Ernst Grawitz. 1911.
- 47) Hein ; Müller's Archiv III. u. IV. 1844.
- 48) Hein ; Schmidts Zahrbücher XLVS. 10.
- 49) 大澤岳太郎 ; 新撰解剖學卷一、
- 50) Rauber ; L. d. Anatomie.
- 51) Bruck ; I. Krankheiten d. N. u. M. sowie R. u. K. II. Aufl. 1912.
- 52) Urbantschitsch ; Handbuch d. O. von Schwartze I. 415. 1892.
- 53) R. Kayser ; A. F. O. XXXIX. 115.
- 54) Schadn St. Paul ; C. F. L. V 586.
- 55) Burnett ; A. F. O. Nr. X. 220.
- 56) Brieger ; K. Beitrage Z. O. 140. 1896.
- 57) Leube ; D. M. W 1882.
- 58) Schützler ; B. K. W 1879.